

書評

鏡島元隆博士著

道元禪師とその門流

駒澤大學教授鏡島元隆博士が、このたび誠信書房から「道元禪師とその門流」なる書を公刊された。多年にわたる研究の成果をまとめられたものである。その内容は、道元禪師と宋朝禪、南宋禪林の一考察、道元禪師における師の意義、天桂傳尊の思想、天桂派下の思想、禪戒思想の展開、古規復古運動とその思想的背景、桂林崇琛について、無著道忠と洞門の交渉、それに無著道忠の「正法眼藏僧評」が附されている。

これらの論文はわれわれ門外漢の容易に窺知し憶断すべきものではないが、あえてその特色をあげれば天桂の研究である。すなわち天桂傳尊の思想、天桂派下の思想の研究において、従来傍流の學説として貶抑されたものを高く評價したところにある。そして他の所論も天桂の學風をもつて論ずるところがあり、宗學に革新的な眼睛を點じているかに思われる。

いうまでもなく、天桂傳尊は江戸期に出でた洞上の宗匠である。「苟も理に合はずんば則ち妄なり、邪なり。無妄は實理自然の謂なり。其理然らずんば然るを以て之を然りとす。其理通ぜずんば通を以て之を通ず」とは天桂の宗學に對する態度であつた。江戸期には

諸宗の學事大いに興隆し、宗學の發達をみた。しかし宗學なるものは、自宗を信仰的に莊嚴し、他宗門の研究をせず、佛教全般に對する合理的解釋を缺くために、ややもすれば排他的な思想をもち、偏狹的なものとなつて傳統的解釋を金科玉條とするにいたる。

天桂と同じ頃、曹洞宗には卍山道白がある。卍山は宗統復古の大業を成就せしめた偉傑である。爾來曹洞宗學は卍山の一師印證・面授嗣法の宗義をもつて正統とされ、天桂の思想は異端として斥けられた。しかし時代の推移とともに宗學は客觀的な立場において研究がすすめられなければならない。このようなときにあたつて著者は宗門以外に道元禪師を研究する人のなかつた徳川時代と異つて、いかなる自由討究にもこの先驅者に報いたごとくその主張を禁遏せしめることの不可能なる今日において、かかる自由討究の先蹤たる天桂を開放して、その認むべきところは認め、その難すべきところは難じて、宗旨の闡明に向つて進むことはわれわれにとつて喫緊な問題でなければならぬ」として天桂の研究をすすめている。

著者のこのような研究態度は、客觀的立場に立つて宗學に反省を促しているものである。そしてまた曹洞禪獨自のものを打立てようとするものに「桂林崇琛について」の論文がある。黄檗隱元の來朝はわが國禪界に大いなる影響を與えた。臨濟、曹洞を問はず、進歩的な禪僧は長崎に走つて清新な空氣に觸れようとした。しかし妙心寺の愚堂等が斷乎これを退けたことはよく知られている。妙心寺においては最初から隱元招請に關して激しく論争されたのであるが、曹洞の禪僧には隱元の來朝當初においては一様に影響力の強かつたことは、當時の肖像畫にもよく現われている。しかしやがて曹

洞禪獨自の在り方が樹立されねばならないが、ここにおいて著者は「桂林崇琛について」を論述していることは注目される。

なお近世禪界にかがやく妙心寺の学匠「無著道忠と洞門の交渉」なる一篇があり、また無著道忠の「永平正法眼藏僧評」を附している。無著が書誌學的研究に基いて、正法眼藏（現行九十五卷）を從横に批判したのが僧評である。無著は舊藏する正法眼藏の六十卷本には古徳を謗斥するところはないが、八十四卷本（養華本）には道元が臨濟・徳山・大慧を謗斥している。六十卷本は棟本として抹去したものか、或はまた六十卷本が眞本で、後人が竄入増廣したのが八十四卷本であろうかとしたのである。著者はこのことに關して「無著がこのような結論に到達したことも、他門に屬するためには校勘の資料が充分に得られなかつたこと、道元禪師の臨濟宗に對する評破が臨濟宗に屬する無著をして學問的冷靜さを失わせたためであろう」としている。しかし著者はさらに「一代の學匠によつて試みられた正法眼藏研究は、今後の研究に對して示唆を與えるものが少くないであろう」としている。著者が高祖道元に對する無著の激しい論難の「僧評」を、あえて附録として上載しているところに、著者の眞摯な學究的態度がある。

（發行所 東京都文京區駕籠町七〇誠信書房、定價七八〇圓）

（荻須純道）

花園大學教授 柳田聖山氏 著

訓 註 臨 濟 錄

柳田教授は今回其中堂から臨濟錄の訓註を發刊された。臨濟錄は晚唐にいでた臨濟義玄禪師の言行録であり、その流れを汲む臨濟宗は勿論のこと、廣く世の人々の注目する禪書である。「今日、世界の關心を集めている禪の魅力の大半が本書に本づいているといつても過言ではないであろう」と著者がいつているのもむべなることであらう。

最近臨濟錄の研究は長足の進歩をなし、さきに今津洪嶽教授は「臨濟大師の教學的基盤」（禪學研究四十五・六・七號）なる論文を發表し、まは陸川堆雲氏は「臨濟及び臨濟錄の研究」に引きつづき「臨濟錄詳解」なる大著を發刊されたが、柳田氏は陸川氏の後につづいて今回「訓註臨濟錄」を公刊されたのである。柳田氏がこの書を執筆するまでには、かなり長年月にわたつて研究され、「興化存獎の史傳とその語録」（禪學研究四十八號）、「臨濟栽松の話と風穴延沼の出生」（禪學研究五十一號）、「唐宋五代の河北地方に於ける禪學發展の歴史的社會的諸事情」（日本佛教學會年報第二十五號）等の論文を發表している。これらの研究成果がみものつて、本書が世に出る運びとなつたのであらう。

著者が本書を訓註するにあつて、まず重點をおいたのは語學的立場である。臨濟錄が難解なものであり、寄りつきがたいのは、唐

宋の俗語が用いられているからである。中國俗語の研究は近年著しい發展を遂げたのに、禪錄においては、いままでこの角度からは研究されなかつた。しかし、著者はまずこの角度から研究に着手した。このことに關して著者は「私はこの訓註はまだ貧弱なものであるが、頼にも今日我が國の中國近世文學の研究の第一人者たる入矢義高先生の御指導を得たことを特記して、今後この本を利用される讀者と共に感謝したいと思う」と誌している。

臨濟錄の註釋書は近世にいたつて數多く出されている。夾山鈔（夾山）、撮要鈔（道空）、萬安鈔（萬安英種）、摘葉（耕雲）、疏澹（無著道忠）等世に知られている。このうち著者は無著の疏澹をもつて一等群を抜いているものとしている。無著の綿密な書誌學的學風によつてなされたこの書は、臨濟錄研究の最高指南書であるとなし、「この度のささやかな訓註の仕事の如きも、若し一點の長所ありとせば、その殆んどすべてを右の疏澹に負うものである」と誌している。

さらに王常侍については、從來馮山門下の王敬初と見られていたが、これは臨濟に關係がないと考證し、また臨濟錄を編集した三聖惠然については、すなおに肯定してよいと思うとしている。この點陸川氏とは異つている。著者をしていわしむれば、現存のような臨濟錄が惠然によつて集められたとすることはともかくとして、臨濟の死後、何らかの語録は作られていたと思うとしている。

著者は長年、祖堂集の研究をして來た。祖堂集の臨濟傳は行録や景德傳燈錄等の記述とは異つている。これらの文献より古い祖堂集の記述を掲載して臨濟傳の修正をしている。

なお塔記は墓塔の記として作られたものでなく、行録の結末をなす一章であるとしていることは注目される。しかしこのことはすでに著者が、「臨濟裁松の話と風穴延沼の出生」（禪學研究五十一號）に論じたところである。

以上のような諸點が注目されるが、この書が學界、教界を問わず、裨益するところが多いことを信じ、あえて推稱するものである。

（發行所 京都市中京區寺町通三條北、其中堂、定價四百圓）

（荻須純道）

陸川堆雲氏著

評釋 夜船閑話

このたび陸川堆雲氏は白隱禪師の夜船閑話を評釋され、山喜房から「評釋夜船閑話」なる書を出された。松蔭寺の白隱禪師木像・初版夜船閑話・白幽子像等十數葉の寫眞を口繪としている。

著者はさきに臨濟錄に關する二著を出し大いに臨濟研究をすすめたが、ひきつづき白隱研究に着手された。この書が世に出たのも、その研究の一端であつた。

夜船閑話は白隱が自己の體驗をもつて、修行者のために心身の疾患を救うために書かれたもので、世に知られた書であるが、著者は専門的な評釋・研究をするともに、第三章において平明な口語意譯をなし、わかりやすくしている。是非一讀をすすめる。

（發行所 東京都本郷大赤門前 山喜房 定價 三〇〇圓）

（荻須純道）